

京の今を形づくる多様な価値観。思考が混ざり、試みが立ち上がり、都を生かす鼓動を育む。

U35 KYOTO

ABOUT U35-KYOTO

U35 KYOTO

京都市

プロジェクト
マネージャー

U35-KYOTO 事務局メンバー

プロジェクトマネージャー4名を中心に、3つの事業を進めてきました。
U35-KYOTO 事務局メンバーは既存メンバーからの紹介や web からの参加希望によって、立ち上げ当初の20名から、1年間で72名まで増えました。

media

note を使い、U35 世代の多様な価値観を発信。
8ヶ月で21名のインタビュー記事を掲載したほか、イベントレポートやタブロイド編集記事も不定期に更新。

project

プロジェクト相談会を、4日（各60分×8枠）開催。facebook と Web サイトで相談者を募集し、のべ42名が参加。アドバイスや人・団体の紹介などを支援。

tabloid

京都市基本計画を起点に、U35 世代の活動や価値観、U35-KYOTO から生まれた取組や思考を紹介する冊子。5万部を発行し、京都内外の幅広い世代に届ける。

U35-KYOTO がお手伝いできること

こんな方々ご連絡ください

法人の方へ

- ・企業内で U35 のような若手チーム、コミュニティを立ち上げたい
- ・当タブロイド紙のような冊子を作りたい
- ・地域や組織の新しいプロジェクトを支援したい
- ・U35 世代の意見を聞きたい
- ・U35 世代とコラボ企画をしたい

— U35-KYOTO からのお願い —

U35-KYOTO ではスポンサー企業を募集しています。
U35-KYOTO の活動を応援したい、メディアに広告記事を掲載したい、京都をより良くしていくために継続的に関わっていきたくと考えられる方はお気軽にご連絡ください。

個人の方へ

- ・事業相談をしたい
- ・交流会に参加したい
- ・U35 を応援したい

問合せ U35-KYOTO 事務局
URL | <https://u35.kyoto/>



web



facebook

発行 | 京都市総合企画局市長公室政策企画調整担当

制作 | U35-KYOTO 事務局 プロジェクトマネージャー | 原田 岳 編集 | 柴田 明 (株式会社 おいかぜ) デザイン | 山本 安佳里 (AKARI DESIGN)

撮影 (p1-4) | 其田 有輝也 コーディネート | 前田展広事務所 印刷 | サンケイデザイン株式会社 発行年月 | 令和 3 年 3 月 ※本紙掲載内容の無断転載はご遠慮ください。

※掲載にあたり、敬称は省略させていただきました。 ※本紙データは令和 3 (2021) 年 3 月現在のものです。 京都市印刷物 第 023245 号



京都市
CITY OF KYOTO

CONTENTS

1-2 media / 3-4 プロジェクトマネージャー 4 人の思い
5-6 project / 7-8 過去でもあって、今でもあって、未来でもある。 / 9-10 interview
11 data / 12 message / 13-14 重点戦略

2025 年までの京都のまちづくりについて大きな方向性を示す
「はたけ未来へ! 京プラン 2025 (京都市基本計画)」を、U35 世代の多様な価値観を通して届けます。



1 # 愛と力の両方が必要
日常の他愛もない人との関わり合いが人の豊かさに直結している
社会でなんかしたい



2 # 違和感から目を逸らさずに向き合い、対話する
立ち向かうなら一人ではなく、皆で分かち合う
世界の中での自身の立ち位置を考える



3 # 人生が豊かになる選択を
この世界は素晴らしい
未来のために手をつなぐ



4 # お客さまに感謝を伝える地道な努力を欠かさない
私にとってはただの一日、お客さまにとっては一生の思い出
軸はぶらさず、新しい挑戦をする



5 # まちに関わる機会をつくる
まずは私たちからやってみる
捉え方から幸せをデザインする



6 # 素直に行動にうつす
楽しいをカタチに
一人勝ちではなくみんなで勝つ



7 # 違和感をわたし探しの出発点に
田舎・ローカルのポテンシャルを誇りに
想いで繋がり続ける関係



8 # 誠実に人と向き合う
ノットを繋いでいく
助け合いながら成長していく



9 # 正解はいくつもあるかもしれない
想いがつながる強さ
歴史と文化に紐付けることで生まれる価値



10 # 多様性の理解のための共同体験
掛け合わせから生まれる新しい価値
自分の頭で考えること



11 # 義理人情
常に変化することを恐れない
自分の実力を俯瞰してみる



12 # 正解って1つじゃない
良いことは分かち合い循環させたい
自分の感覚に素直になる



13 # 写真と映像で人をつなぐ
想いとお金のバランス
次世代のロールモデル



14 # 街のみんなで支える
自分の言葉を持つ強さと優しさ
頭の中のカオスを大切に



15 # 鉄の心と感謝の気持ち
便利に頼りすぎない
自分の気持ち次第の強さ

京都の今を生きる U35 世代の多様な価値観を、インタビュー記事として発信する U35-KYOTO media。連載に登場いただく 15 名と共に京都の街を歩き、生きる上で大切にしていることを伺いました。

1：清水 大樹（同）なんかしたい 代表 2：行元 沙弥（特非）グローバル人材開発センター 代表理事 3：河内 康太郎（株）ロマンライフ 取締役 4：大西 里枝（株）大西常商店 4 代目若女将 5：山本 彰代（特非）場とつながりラボ home's vi 6：田中 淳士（株）食一 代表取締役 7：高島 千聖 立命館大学 / Orang Earth 8：井上 雅登 京都リサーチパーク（株）イノベーションデザイン部 9：松居 佑典（株）BugMo Co-founder & CEO 10：石川 紘嗣（福）香東園 11：松島 一晃（株）マツシマホールディングス 代表取締役副社長 12：山本 安佳里 AKARI DESIGN / コドモト 代表 13：其田 有輝也 Freelance Photographer / Videographer 14：福森 美紗子（一社）アーツシード京都 / THEATRE E9 KYOTO 15：安楽島 康正 桂春院 副住職





変化を起こすためのきっかけを、 多くの人が欲していた。

原田：色んな人に、U35-KYOTO は今までにない新しいコミュニティだと言われます。ここまで約 1 年間動いてきて、U35-KYOTO の存在意義ってなんだと思いますか？

中馬：ここ数年、色んな人から、若者の新しいコミュニティを作りやって言われてたんです。そんなタイミングでこの事業の構想を聞いて、ちょうどいいきっかけだなと思いました。経営者の集まりや異業種交流の場は他にもたくさんあるけど、それぞれ分断されていて雰囲気もかたいんですね。色んな人が気軽に立ち寄れる、楽しい雰囲気の間を作れたかった。

仲田：プロジェクト相談会でも、「1 人でやる限界を感じていた」「仲間が欲しいけどきっかけがなかった」という声が多かったですね。コロナ禍の影響もあって、共創の場やつながりを求める気持ちが社会全体として高まっているのを感じました。

中村：今、社会には目には見えない分断がたくさんあって、お互いの思いを共有する時間をもっと大事にできればいいのに……と思います。自分が生きることと精一杯な人がとても多い。毎日忙しすぎて、大事なことを見失ってしまうんですね。そんな中で、U35-KYOTO は一人ひとりの価値観を大事にしているから居心地がいいんだと思います。

中馬：U35-KYOTO を通じて、皆が僕の友達と出会ってくれるのがめっちゃ嬉しくて。この場所を貸してくれた桂春院の副住職も友達なんだけど、さっさ彼と話をして皆も彼を応援したいって思ってくれたはず。こうい

うつながりが生まれるコミュニティは、なかなか他にないと思う。自分の利益と関係のないところで、誰かを応援したり、喜ばせたりできる場になってきたよね。

仲田：U35-KYOTO に来てくれた人と話していると、主語が「私」や「うちの会社」じゃなく「私たち」になることが多いですね。あとは、失敗をポジティブに捉えるところも共通しているかな。

中村：自分がプロマネ（プロジェクトマネージャー）に選ばれた理由が最初はわからなかったんですけど、私の役割は、「内と外」や「新しいと古い」をつなぐ架け橋になることなのかもしれないと、皆と会話を重ねる中で感じました。外から見ると「意識高い系」というラベルをはられてしまうのは避けたいと、いつも思っています。

原田：（中村）菜穂さんは、いつもバランスをとってくれますよね。よく「分断をなくして、異なる色が混ざり合うマールな世の中に」って言っていたのをすごく覚えてます。

対立せず、依存もせず、自分たちで 世を実現する世代。

中馬：今って転換期ですよ。経営者の意識も、これからもっと変わっていくはず。最近、1 つの会社だけでは無理だになってすごく思う。自分の会社もそうだし、周りを見ても。

原田：もう社会のシステムが限界を迎えているんでしょうね。行政や組織が課題を解決しようと頑張っても、そこに頼りすぎる人が出てきてしまう。依存するから不満が出るんだと思うんです。そんな大人たちを見て育ててきて、「自分たちでどうにかしなきゃいけない」と気づく人が増えてきたんだろうな。これをきっかけに、自分たちの課題

は自分たちで解決できるようになっていかないといけないですね。

中村：行政に対して安易に不満を言う人も多いけど、地域の活動に参加もせず嘆いてばかりいるのもどうなんだろうと思います。明治時代にまちの子どもたちを皆で育てようとか力を合わせて番組小学校をつくったように、京都には昔から、自分たちのまちを自分たちで良くしようとする文化があったはず。何もかもはできなくても、誰でも何か 1 つくらい、できることがあるはず。

原田：そうですね。その中で U35-KYOTO がやるべきなのは、僕ら自身がこれからの京都に必要なと思うことで、かつ行政にはできないことだと思います。行政の方々ができることを僕らがやっても意味がないし。奇抜なアイデアも出しつつ、現実的に続けられる計画に落とし込んで実行していきたい。

中村：専門家やコンサルタントは増えているのに課題は複雑化していくのはなんでなんだろうと、学生の頃から感じていました。世代を問わず京都を愛する人はすごく多いけど、必要なのは愛情だけじゃないんですね。同じことの繰り返しにならないよう、言葉を掲げるだけでなく、行動することが大切だと思います。

中馬：そのためには、人と人とのつながりが大事な気がするよね。新規事業ってだいたい失敗するじゃないですか。その中で危機を乗り越えて続いていくのは、「こいつのために何とせな」っていう人間くさい感情がある時やと思っていて。時間をかけて積み重ねた関係性が、いざという時の原動力になる。U35-KYOTO での出会いが、そういう強いつながりに育ってほしいよね。

人のつながりが、経済的な判断軸を 飛び越えるまちへ。

原田：経済の軸を超える何かがあったら最高ですよ。僕は社会課題を解決する起業家の支援を仕事にしているからか、周りに優しい人がめっちゃ多いんですよ。普段から「なんか悩んでんの?」「手伝えることある?」って聞いてくれる。これって京都の特徴なんじゃないかと思います。誰かを助けたいという思いが循環して、まち全体の幸福度が上がっていくといいなあ。

仲田：人と関わる時に、相手が「何に」関心があるのかよりも、「なんで」それに関心を持ったのか、が大事ななと最近思います。理由まで知ることができたら、その人を手伝いたいという気持ちが自然と湧いてくるんじゃないかな。

中馬：僕は友達や社員が幸せになってくれることが一番嬉しいんですけど、「社員の幸せ」について語り合える経営者仲間は、同世代や下の世代が多いよね。お金の使い方にも、けっこう世代間の違いを感じます。僕は高級な店で飲むよりも、その分を社員の給料や新規事業の予算に充てたいと思ってしう。

中村：今の 20 歳前後の「Z 世代」と呼ばれる人たちは、社会課題への意識やグローバル視点を標準的に持っているの、彼らから学ぶことがたくさんあります。少し先を歩く私たちの経験や視点が彼・彼女たちの役に立つ場面もあるだろうし、お互いに学び合う姿勢でいたいですね。

仲田：10 代や 20 代も含めて、U35 世代は何を人生の軸に据えるかを模索している感じがしますよね。今まではたくさん稼いで、マイホームを建てて……という定型化された幸せのかたちがあったけど、それだけじゃないことに気づき始めたというか。

中馬：これから僕らが頑張らなあかんのは、今話しているような価値観の変容を、目に見えるかたちで体現することかな。皆がなんとなく感じていることを、事業やイベント、制作物に落とし込んで、他の人にも伝わるよう

に実行していきたい。U35-KYOTO をきっかけに、勝手にどんどんプロジェクトが立ち上がっていったらいいよね。将来、京都で愛されている事業や会社のルーツをたどてみたら、あれもこれも U35-KYOTO やんっていう状況になったらめっちゃ嬉しい。

京都がよくなっても、他の地域が不幸 だったら意味がない。

仲田：自分のことだけじゃなくて、まちとか社会とか、全体を想像することは大事にしたいですね。何もかもが便利になって最短距離でものことが進んでいくから、周りを見なくても生きていけるようになったけど。

中馬：そう。京都だけがよくなってもだめやと思う。京都でいい動きが起きて、京都にきた他府県の人たちが、いいなと思ったことを自分のまちに持って帰ってくれたら嬉しい。たとえば、U35-KYOTO が企画する修学旅行があったらいいなと思っていて。「京都で働いてる大人たち、かつこいいな」って中高生が思うような。

原田：今も色んな話が出てますけど、取り組もうと思って、結局実行せずに終わることってありますよね。一方で、



目標数値や期限を決めることの弊害もあるし、バランスが大事ですけど。ただ僕らの子どもの世代が生きる社会を想像すると、「こうなったらいいよね」じゃ間に合わないぞっていう危機感もあります。

仲田：U35-KYOTO は徐々に関わる人を増やしながら手探りで進んできたから、そのバランスは常に悩みとしてありますね。そんな中でも、イベントや企画会議で自主的に役割を見つけて動いてくれる人がいっぱいいて、たとえば、11 月の交流会では、カメラマンのお二人（U35-KYOTO メンバーの小黑さんと其田さん）が抜群のチームワークで撮影してくれました。競い合うわけじゃなくて、でも刺激し合っている様子を見て、ちょっと感動しました。

中村：お寺も神社も大事にしつつ他の宗教も受け入れるし、新しい芸術も文化も垣根を越えてまると取り込んで、生かし合う。それができるのが、京都のまちや人の懐の深さだと思います。これからは違いを許容して、適材適所

で、力強いコミュニティを育てていけたらいいですね。

仲田：新たに 40 歳以上の「OVER40」コミュニティを結成したいという先輩方がいるんですよ。その方々から「私たちが若い世代を否定しないから、私たちのことも否定しないでね」って言われて。世代間でどうしても価値観の違いは出てくるけど、そういう意識があれば、対立せずお互いから学び合えるんだと思いました。この 4 人も、性格や感性がバラバラだからこそ、それぞれが得意なことを存分に発揮できて、U35-KYOTO の幅が広がった感じがします。

原田：U35-KYOTO が生まれたのは、上の世代の人たちが行政と協力する風土を作ってくれたからだと思うんです。京都というまちで、自分たちは何を大事にしたいか、どうすればそれを大事にし続けられるのか。一人ひとりが考えた多様な意見を持ち寄ってかたちにしていくことが、U35-KYOTO の 1 つの価値なのかなと改めて思いました。

U35-KYOTO から生まれたプロジェクトを 発表する交流会を開催！

- 交流会で出会った大学生がプロジェクトに参加！
- プロジェクトをサポートするため、東京からUターンすることが決定！
- サポーター企業から、社員を U35-KYOTO に参画させたいと希望がありました！
- 他の経済団体とのコラボレーションの話が始まりました！



若者の力・行動が京都の未来を創る！

京都は、1000 年を超える歴史の中で自然災害、疫病など、様々な危機に瀕してきましたが、そのような時にも京都の人たちは深く祈り、願い、そして結末して、危機を乗り越え、より魅力的なまちを築いてきました。人口減少、地球温暖化、自然災害や新型コロナなど、社会課題は複雑・多様化しており、持続可能なまちづくりを推進するには、行政のみならず、あらゆる主体が課題を持ち寄り、知恵を集め、連携して行動することが重要です。

U35-KYOTO の皆さんは、コロナ禍の中でも、まちの課題の解決に向けて、人ごととせず、「じぶんごと、みんなごと」として、若者ならではの創造力、連帯感、実行力で挑戦していただいています。5 年後、10 年後に振り返った時に、こうした取組が京都のまちづくりの礎になっていると確信しています。京都市は、100 年先を見据えて、今、何をなすべきか！2021 年度から 5 年間の進むべき方向性を定めた「[おぼたけ未来へ！ 京プラン 2025(京都市基本計画)]」を、多くの市民の皆さんとの議論を踏まえ、市会の議決もいただき、策定しました。危機的な財政、山積する社会課題、これに真正面から向き合い、乗り越え、持続可能で明るい未来へ共に挑戦しましょう。

京都市長 門川 大作



中馬 一登
(株) MIYACO 代表取締役 / 長男

2014 年に兄弟 3 人で MIYACO を設立。教育事業や観光事業、地方創生事業など、事業を広く展開。同業他社や異業種によるコラボ企画から行政連携プロジェクトと枠組みを超えたつながりを生み出す構想家。



仲田 匡志
(株) MIYACO コーディネーター / フリーランス

沖縄県那覇市まれ、名古屋・大阪・京都育ち。10 代から自分らしく生きる力を育む教育事業「ワンゼロ FC Kyoto」の運営やアクセラレータープログラムのメンターなど「やってみたい!」を応援する伴走者。



中村 菜穂
(一社) 京都ジェンヌの会 代表理事 / 宅建士 / 防災士

10 代の頃からライフワークとして少年補導委員会学生班リーダー、消防団、動物の保護活動など京都の街でボランティアに取り組む。京都ジェンヌの会では、命の尊さや郷土の文化を大切にすることをこれらの世代と育む。



原田 岳
(株) taliki CCO / (一社) Impact Hub Kyoto Maker

メキシコやグアテマラで放浪の後、シェアハウスを軸とした会社を友人と創業。2018 年に京都に移住。現在は、社会起業家支援事業や coworking スペースの運営など、「愛を社会に実装する」をテーマに活動中。

「もっと良くしたい」「現状を変えたい」という 32 の思い

のべ42名にご参加いただいたプロジェクト相談会には、U35世代の挑戦したいことや、広げたい活動がたくさん寄せられました。2021年3月時点で32のプロジェクトが生まれています。その中から16件をご紹介します。

選ぶ「エネルギー」で
生まれる未来



選ぶエネルギーによって、未来は変わっていきます。エネルギーを選ぶハードルを下げ、その先にあるあたたかな繋がりを紡ぐ未来について考えていくために、地球環境に優しいエネルギーとそれを広げる事業モデルについて議論しています。既存のエネルギーの生産方法やそこで起こった問題を振り返り、自然エネルギーのある未来を想像するワークショップの開催を予定しています。さあ、エネルギーを選ぶことから、望む未来への投票がはじまります

霍野 廣由 | TERA Energy (株)
矢島 里佳 | (株) 和える

「スポーツ×産業」の
新しい経済圏を描く



京都のスポーツクラブが、他の産業と連携を持つことで新しい経済圏を育み、健康寿命の延伸や貧困などの社会課題を解決していく試みです。企業の方々と、既存の関係に捉われない新しい関係を築くための議論を重ね、京都から世界へ、関係性を広げていきたいです。スポーツが持つ人の気持ちを動かすパワーを信じ、地域企業や大学生とのコラボレーションから、人々に夢や希望を届ける活動を進めます。京都にスポーツチームがあってよかったと、みんなが感じられる新しい経済圏を育みます。

添田 隆司 | おこしやす京都 AC (株)
大木 碧・今井 里美 | スポーツコミュニケーション KYOTO (株) (京都ハンナリーズ)
石井 敬己 | (株) 京都パールサンガ

過疎地域と料理人をつなぐ
プラットフォーム
「サーカスキッチン」



過疎地域では人口減少により、常設で飲食店などの店舗を運営することが難しい現状があります。地元の商店も減っていき、選べるサービスが少ないことが問題になっています。そこで私たちは、過疎地域への料理人の出張をコーディネートし、期間限定でレストランを開く「サーカスキッチン」事業を始めました。サーカスのようにたまにやって来るお店があれば、人口が少ない地域でも専門店のサービスを楽しむことができます。過疎地域の暮らしを豊かにすると同時に、料理人の働き方を多様にする取組です。

古市 邦人 | (一社) NIMO ALCAMO

ただただ、
「来てくれてありがとう」を
世界に伝えます



あつたかい交流、それは誰かのちょっとした寄り添いから始まる。国内外からたくさんの人が集まる京都だからこそ、感謝の気持ちを世界に届けて、互いに寄り添い合える世界をつくりたい。まずは京都から世界に気持ちを届けて寄り添ってみる。きっと向こうも寄り添ってくれたり、嬉しい気持ちになってくれるはず。本プロジェクトは、京都で活動する皆さんから海外の方へのメッセージを集め、在日大使館を通じて、世界に「ありがとう」を届ける取組です。ありがとうが響き合う関係を京都から始めませんか？

福田 千恵子 | (一社) CHIE-NO-WA

誰一人取り残さない、
望む人生を選び
つくるための教育



非大卒、高校中退、少年院・児童養護施設出身。どんなバックグラウンドでも、望む人生を叶えられるということを伝えたい。環境が変わり、何かに気づききっかけがあると、人は変わることができる。可能性に満ちている子どもたちが、自分を信じ前に進めるように。18歳から成人となる未来が近づいています。18歳の彼・彼女が進路を決める時に、進学・就職の選択肢が十分にあり、納得のいく選択ができる。そんな社会を実現するための教育に取り組みます。まずは京都でキャリアプログラムをつくり、広げていきます。

勝山 恵一 | (一社) HASSYADAI.social
中馬 一登 | (株) MIYACO

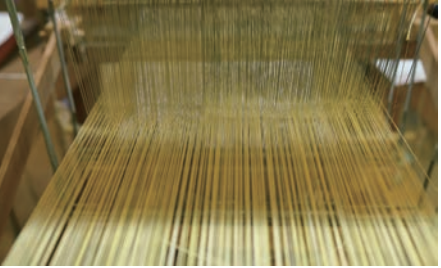
言葉だけのコミュニケーションから
グラフィックのある
コミュニケーションを日常に



人は、情報の8割を視覚から得るといわれています。だからこそ、音声による言葉のキャッチボールだけでなく、図や絵などのグラフィックを添えると伝わりやすい。待ち合わせの場所も、言葉だけで説明するより地図がある方が分かりやすい。同じ言葉でも捉え方が違うことが、図や絵を通して分かるかもしれない。紙とペンで広がる豊かなコミュニケーションが日常に増えていくことを願い、その価値を広げる取組です。まずは、グラフィックレコーディング（グラレコ）の技術を磨く実践の場を増やす活動と、グラレコを体験していただく活動から始めます。

三宅 正太 | (特非) 山科醍醐こどものひろば
山本 彩代 | (特非) 場とつながりラボ home's vi
仲田 匡志 | フリーランス

京都の素晴らしい手仕事を、
自分たちで選んで、市場に届ける



京都の伝統や工芸にどのようなものがあるのかを、私たち若い世代の多くは知る機会がありません。素材や工具へのこだわりや、1つ1つの作業が持つ意味の深さ、時代とともにアレンジを加えながらも変わらない本質的・普遍的な価値。手仕事だからこそ生み出せる価値がそこにあります。改めて伝統工芸の素晴らしさを学び合い、若い世代からその価値を市場に届ける。京都から日本、そして世界へと広げていく取組です。まずは、京都の手仕事を学ぶ機会づくりからはじめます。

亀田 富博 | (株) 亀田富染工場
中馬 一登 | (株) MIYACO
原田 岳 | フリーランス

自分らしさを表現できる舞台を
10代から



チャレンジが歓迎される社会のはずなのに、子どもには無理だとか、やめたほうがいいという大人が多いような気がする。10代だっていろんなことに挑戦したい。学校の校則や家の決まりも大事だと思うけど、「やってみたい」という好奇心も大事にしたい。何かにチャレンジしたい人が年齢に捉われず挑戦できる舞台を、10代の私たちが創ります。人が集まるのが難しいなら、離れてもできる表現の舞台は何かを考える。制約のある中でも可能性を見つけ、形にする取組です。

斉藤 心南 | HERA-HERA 実行委員会

京都の価値を
旅行の視点で捉え直す



京都を旅行することの価値を捉え直したい。京都の魅力は寺社だけではなく。U35世代のユニークな活動を追体験するようなツアーや、大事にしたい価値観を深められるようなツアーができないかと考えました。既存の枠組みに捉われない旅行の提案を目指し、U35世代との共創からツアー企画をつくる試みです。まずは、京都花育エリアで「森林浴」「プレジャー（ビジネス+レジャー）」「教育」を掛け合わせた、癒しと学びの体験型ツアーの企画が始動しています。

山口 あかね | 東武トップツアーズ (株) 京都支店
U35-KYOTO 事務局メンバー

自分たちの街は、自分たちで灯す
京都に新しい「お祭り」をつくる



2020年4月に新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が出されて、京都のまちが元気を失ったように暗くなりました。わたしたちは、もう一度、自分たちが大切にしたい場所を想い合い、忘れないようにするために「竹あかり」という新しい祭りをつくります。小さな喜び・温かさをたくさん感じられるお祭りです。催し会場だけでなく、暗くなってしまった街のどこへでも。わたしたちが想う場所に手作りの竹あかりを灯します。それぞれ大切にしたい場所を灯し合いましょ。

大森 勇志 | みんなの想火 京都

映画館を "アウトリーチ" する。
京都の上映場所を探して、
やってみよう



ドライブインシアターは、車内で感想を言い合いながら楽しむことができる映画の鑑賞方法です。コロナ禍の影響で、日本でも少しずつ広がっています。わたしたちが思う映画の特徴は、「1つの場所」で「不特定多数の人」が「1つの作品」を「同時に」に「共有する」こと。人、場所、時間、体験が集まり刺激し合う、映画という空間をいろんな場所で味わってほしい。大切な人と一緒に、映画というカルチャーを外で楽しめる鑑賞方法を、異なる産業の方々とさらに模索していきます。京都を映画でつないでいく試みです。

宇都宮 信人 | (株) 京都映画センター

古典芸術を
現代・未来に向けて
アップデートする



クラシック音楽や歌舞伎、能といった古典芸術は、人の感情を豊かにするパワーを持っています。しかし、この魅力を知り体感する機会が、日本には決して多くはありません。古典芸術を現代、そして未来に楽しくつなげたい。古典の持つ時代を超えても伝わる魅力やパワーはそのままだに、若い世代の感性を取り入れたアップデートの方法を、様々な分野の方と一緒に模索する活動です。まずはクラシック音楽・オペラのアップデートから。古典の枠にとらわれず、時代にマッチするあり方を探求していきます。

谷本 綾香 | (一社) 英国音楽協会

家で働きたい人の
「ハローワーク」をつくらう



コロナ禍の外出自粛で、家にいながら働くことが珍しくなくなりました。外出が苦手な人や育児や介護をしている人など、家で働きたい理由は色々あります。もし、家で働きたいと望む人が無理なくリモートワークをできるようになったら、どんな社会になるのだろう。家で働きたい人と企業のニーズを聞きながら、在宅ワークをするための環境作りからお仕事のマッチングまで、お手伝いしたい。家にいながら社会と関わる一歩を踏み出してもらう仕組みをつくる取組です。

中峯 良介 | シンク・アンド・アクト (株)
小笠原 恭子 | (株) グランディエー
小島 拓也 | (株) MIRISE
魚見 航大・後藤 大輔・宮崎 雅大 | (株) 革靴をはいた猫
森口 誠 | (一社) 暮らしランプ
京都信用金庫 QUESTION

コミュニティが集う
場の価値を
再定義する



大人数から少人数へ。人の集い方が変わり、コミュニティのあり方や価値も変わろうとしているように感じます。ウィズコロナ・ポストコロナの時代に、人が集まる場にはどんな価値が生まれるのだろう。個性豊かなシェアオフィスやコワーキングスペースの運営者が繋がり、お互いの「場の価値」をみんなで捉え直し、再発信する取組です。プロの目を持つ運営者だけでなく、お客様の視点を持つ大学生も各拠点の見学会に参加します。それぞれの価値を再発見し、お客様に届けることを目指します。

炭峯 昌人 | 秘密基地こむこむ BAR
長崎 桂己 | (株) La GON
小黒 恵太郎 | (株) アイトーン
生田 優里佳 | (一社) 京都知恵産業創造の森
井上 雅登・杉山 智織 | 京都リサーチパーク (株)
坂上 萌・谷野 成実・野口 一真 | 同志社大学

伝統の大和色×サステナビリティ
【京都版和の色 SDGs プロジェクト】



「SDGs」や「サステナビリティ」といった言葉が近年トレンドになっていますが、日本・京都では古くから「足るを知る」ライフスタイルを大切にしてきました。京都ジェンヌの会では、新しい何かを取り入れることよりも、失われつつある暮らしに根付いた文化を知り、「温故知新」を体現することを提案します。そのために、和の色が持つストーリーや美しさを伝えながら、市民の皆さんと共に、持続可能な街づくりのテーマやゴールを見つけます。皆が街づくりを自分事としてとらえ、より大切にしたいと感じる京都版 SDGs を生み出します。

中村 菜穂・山東 晃大・高島 千聖・一瀬 優奈・南 絢加・龍田 春奈 | (一社) 京都ジェンヌの会

コロナ禍における
若者の孤立を救う
タスクフォース事業



コロナ禍で孤立しがちな10代・20代の若者が、社会課題の解決をテーマにした「タスクフォース（プロジェクト）活動」を通じて仲間をつくり、社会との接点を獲得していく事業です。伝統産業や食と健康、地域企業の活性化などをテーマに、若者が共感する企業と関わりながら社会の課題に取り組みます。孤立から連携へ、課題解決を通して繋がりをつくる試みです。「あらゆる若者が、地域や社会のために活動する社会」を目指します。

魚見 航大・後藤 大輔・宮崎 雅大 | (株) 革靴をはいた猫
中馬 一登 | (株) MIYACO

一人ひとりが生活の中で起こした、小さなアクション。それらが積み重なって今の社会があり、私たちが今日何かを始めることが、これからの未来を形づくります。あなたの過去と今と未来はどこにありますか？



京都、そして日本は、どうなっていくとよいだろう

京都で活躍する様々な経歴、職業の U35 世代にお話を伺いました。

動物福祉は誰にでもできる普通のことだと、次の世代に伝えたい。



大西 結衣 Power. 代表

人と動物との幸せな関係を築くために、現状を 1 人でも多くの人に伝え、一人ひとりの判断の前提を変えていくことが私の役割です。具体的には、イベントの企画運営や、アートや環境など他分野での講演、学校への出張授業など。アメリカでの活動経験を活かして、国際動物福祉会議への参加など、海外での活動も続けています。

一番大切にしているのは、動物福祉の現状について知ってもらう機会を増やすことです。現状を知らずにペットショップへ行く人を、責めることはできません。テレビや SNS に保護猫・犬が登場することも増え、世の中は変わってきました。でも、行き場がない動物の殺処分は今も続いています。保健所へ送られる動物が減る仕組みや環境を作らなければ、状況は変わりません。泣いている暇はないと、何度も自分に言い聞かせました。

活動を次世代につなぐために、雇用を生み、拠点を作る準備もしています。自分の生活を楽しみながら取り組める活動へと、動物福祉のイメージを変えていきたいんです。そうやって、閉じた空気になりがちな業界をもっとオープンにしたい。ここから 30 年、40 年かけて、Power. を人と動物との幸せな関係を築く力強いコミュニティに育てていきたいです。

~Yui Onishi~

動物にも優しい社会の実現をめざし、同団体を設立。個人保護主の支援やお寺での譲渡会運営、講演など幅広く活動する。

創造的な世界を目指して。



北澤 真 北澤造園 三代目

庭師としてまだ誰もやったことのないチャレンジをすることを、常々考えています。古典的な日本庭園も好きやけど、歴史の古い京都でこそ、創造的なものづくりをする意義が大きいはず。

僕は最近、造園を頼まれているのに、「ここにこんな絵とか彫刻物を置いたらええな」って考えてしまう時があって。空間を創る方法は、石や木を置くだけじゃないなと。だから、もうすぐ空間をプロデュースする新会社を立ち上げます。仕事の幅を広げて、子どもたちにアートや文化のきっかけを伝えたい。子どもって皆、芸術家ですよ。でも、だんだん常識や規則に縛られて、おもしろくなくなっていく。もっと、新しい挑戦をする人が評価される社会になればいいのに。

ものづくりがお金を稼ぐ手段になってしまうと、良いものは生まれません。造園の仕事で上を目指すには、技術以上に自分という人間を磨くしかない。僕は後輩たちに「このコーラをお茶やと思って飲めるようになれ」と言います。自分の脳を思い込ませられないと、夢なんて叶えられへんから。誰よりも努力して理想を突き詰め、夢を掴み取る。そんなものづくり、そんな人が、増えていくことを願います。

~Makoto Kitazawa~

新たな表現方法を追究し、日本全国、また海外にも活躍の場を広げる。革新的な庭づくりが認められ、展覧会での受賞多数。

誰も気づいていない選択肢を、自分の中から生み出す。



龍崎 翔子
(株) L & G グローバルビジネス 代表取締役

選択肢が多いように見えても、実は固定化したパターンの中で数が増えているだけで、心が惹かれるものは存在しない。そんなモノやコトが世の中にはたくさんあります。一昔前のホテルはまさにそんな状態でした。条件を見比べて選ぶのではなく、自分の感性にぴったりのホテルを見つけて旅に出る。あらゆる場面でそんな選択肢が増えていくことが、社会の豊かさなのではないでしょうか。

ホテル業界を 1 つの大きな山に例えると、頂上を目指すつもりはなくて。けもの道を歩いてきれいな花を探したり、ふもとの泉で遊んだりして、誰も知らない楽しみ方を見つけたい。ホテルという空間を通して何かを伝え、体感してもらうことで、その後の生活に良い変化をもたらす存在でありたいですね。今は、産後ケアや、漢方や鍼灸などの東洋医学、アカデミックな学びの分野とホテルをどう結びつけるかという構想を進めています。

競合がいらない、つまり市場がないところに事業を創っていくので、やはり不安にもなります。でも、差別化に苦労しながら既存の市場に居続けることの方が、よっぽどリスクが高いと感じます。資本金や実績に強みがあるわけじゃないからこそできる闘い方かもしれないですね。

~Shoko Ryuzaki~

19 歳で同社を設立。「HOTEL SHE,KYOTO」などを手掛け、常にホテルの新しい価値を社会に提案し続ける。

思い通りにならない状況を楽しみ、自分の選択を自力で正解にしていく。



山本 周雅 (株) カタルシス CEO

筋書き通りに進む人生ってつまらないなと思っていて。即興性や揺らぎ、変化といった不確定要素を楽しみながら、そこでの選択を自力で正解にしていって生き方をしたいです。浪人という挫折を経験したことで、レールを外れることへの抵抗が薄れたんでしょうね。僕自身も、まだいわゆる「べき論」とらわれてしまう部分もあるのですが、トラブルや想定外の出来事を許容できる空気が世の中に広がっていくいいなと思います。

カタルシスは、人が新しい可能性に触れるための場所なので、必ずしも良い方向へ導こうとしているわけではなくて。他の選択肢を投げかけて、あえて気持ちを揺さぶろうとする時もあります。最初は、単純に自分たちのやりたいことができる場所が欲しかっただけで、社会貢献なんて考えてなかったんです。人が集まってきて、お金が回り出して、徐々に自分たちが提供できる価値を意識するようになりました。

「文化とは無駄である」という言葉がありますが、京都はまさに無駄を大事にし続けてきたまちですよ。これからの時代は、文化やアートが価値を生む鍵になってきます。構想中の学生向けの新事業でも、文化に触れるプログラムを提供したいと考えています。

~Syuga Yamamoto~

京都大学在学中に、学生のための語り BAR を起業。採用支援など、企業と学生のマッチングを助けるサービスを展開。

やりたいことを諦めずに挑戦できる人を、もっと増やしたい。



カブレッサ デアバロ / 中須 俊治
(株) AFURIKA DOGS 仕立て職人 / 代表取締役

中須：もっと気軽に起業できる環境になるといいですね。僕は退職も起業も、すごくやりづらかったから。反対する人も多かったし、支援窓口に行ってもお金を稼ぐための話しかしてくれなくて。多方面のサポートが充実して、やりたいことを諦めずに挑戦する人が増えてほしい。だって、やってみないとわからないことの方が多いじゃないですか。

デアバロさんとお店を開けたことで、可能性が大きく広がりました。それまでは文章や動画でどれだけ発信しても、思いが届いたという実感がなかった。でも、お客さんの前で彼がミシンを動かす光景に、確かな手応えを感じたんです。事業としての効率性は良くないかもしれないけど、正しさよりも楽しさや優しさを大事にしたいですね。

デアバロ：型紙を使わず、お客様の希望に合わせて服を仕立てていくこの仕事は、とても楽しいです。今後は、他ブランドとの商品開発やミシン教室にも挑戦したいです。日本とトゴの一番の違いは、日本人はネガティブな発言をしないこと。料理がまずいとかね。言うて仕事なくなっちゃうのかなと思って、私も外では氣をつけています（笑）。全ての人を尊敬することを大事に、目の前の仕事をしっかりやっていきたいです。

~Kabressa Deabalo/Toshiharu Nakasu~

トゴ共和国出身、2018 年に京都へ移住。/ 学生時代に訪れたトゴ共和国の布と京都の染色を組み合わせ、商品を開発。

どうせ生きるなら、誰かの幸せのために命を使いたい。



中村 多伽 (株) taliki 代表取締役

全ての人間は、誰かにとっての大切な人だと思うんです。たとえば私が死んだら、きっと母は激しく取り乱してしまう。どんな人にもそういう存在がいるはずで。自分の命を何のために使おうかと考えた時に、どうせなら人類の苦しみをなくし、幸せを増やすために動こうと思いました。

社会課題を解決するための意識も政策も事業も、今は全く足りていません。政府や国際機関の活動にも必ず限界があるので、結局のところ、一人ひとりが自分で考えて解決能力を高めるしかないんです。でも、「やらなきゃいけない」では続かない。豊かになる、ハッピーになる、という前向きな動機がないと。その切り口が私にとってはビジネスでした。目先の成果も大事ですが、組織や地域が 10 年後、20 年後にも目を向けることで、事業の価値がより本質的になっていきますよね。

社会起業家の支援は、割合でいえば、軌道に乗るところまで到達する事業は半分もありません。立ち上げの段階では、誰にも求められないし、感謝もされない。それでも 1 人でやり続ける稀有な存在を、なんとしてでもサポートしたいです。一足飛びにはいかなければ、やがて彼らの事業を必要とする人が増え、社会がその価値に気づくと思っています。

~Taka Nakamura~

社会課題を解決する起業家への事業支援や投資を行う。学生時代には国際協力団体の代表としてカンボジアに学校を建設した。

人と違うことを、素晴らしいと思えるように。



詩歩
「死ぬまでに行きたい！世界の絶景」プロデューサー

子どもの頃は、学校の成績や部活の順位のような、誰かが決めた評価基準の中で頑張らないといけないと思っていました。でも、全然違うところで輝いている人がたくさんいることが、大人になるとわかってきて。人と違うことはいいことだって最近すごく思います。多様性の乏しい島国で育つ日本人にこそ、違いを肌で感じられる「旅」がもっと身近になるといいですね。今はスマホの中に情報が溢れているので、旅への憧れは持ちにくいかもしれませんが。でも、実際に現地へ行くと、想像もしなかった景色や体験に必ず出会えます。

世界の人って、意外と日本のことを知らないんです。ポケモンのファンでも日本の作品だってことは知らなかったり、東京を中国の都市だと思われていたり。日本の良さを世界に届ける動きは、まだまだ足りていないだと思います。

私はもともと歴史が好きで旅を始めたのですが、絶景について調べることで、地形や気候、災害など色々な分野に関心が広がってきて。今後は、学びにつながるコンテンツも発信していきたいです。絶景を目の前にして、自然の偉大さに感動した経験は、視点や価値観が広がっていくきっかけにもなるはず。そんな機会を増やしていけたらと思います。

~Shiho~

世界中の絶景を紹介する SNS 「死ぬまでに行きたい世界の絶景」を運営し、書籍も複数出版。フォロワー数は 100 万人以上。

人のつながりと再生可能エネルギーを掛け合わせ、アイデアを実現する。



山東 晃大
京都大学経済研究所 先端政策分析研究センター 研究員

大学での研究と並行して、長崎県の小浜という小さな海沿いの町で、地元の人たちとワインや塩づくり、マリナクティビティなどの事業を営んでいます。僕の役割は、誰かのやりたいことと、誰かのできることをつなぐこと。そして、事業化に必要な事務作業などのお手伝いです。皆がやりたくない面倒な仕事を引き受けることで、皆の夢が実現する。僕自身もすごく楽しいし、まことにいい循環が回っている実感があります。失敗もたくさんしましたが、動き出すきっかけを待っているアイデアがまだまだあるので、小浜は今後さらに楽しいまちになっていくと思います。

京都では、再生可能エネルギーによる地域経済の活性化をテーマに研究をしています。研究を社会に還元するためには実践経験が必要だと考え、起業に挑戦することに。各事業の主体は地元の方々ですが、僕も外から口を出すだけでなく、出資したり運営に携わったり、腰を据えて活動しています。

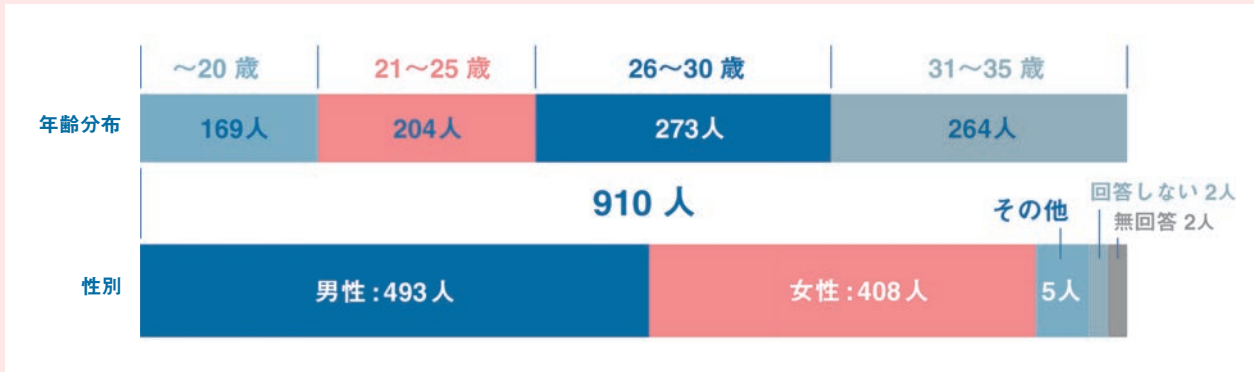
京都は人も文化も豊富なので、挑戦を応援する仕組みさえあれば、おもしろい取組が勝手にどんどん生まれていくはず。そういう場には、自然と人も集まります。また、脱炭素化も全国に先駆けて進めていけるよう、頑張りたいですね！

~Akihiro Sando~

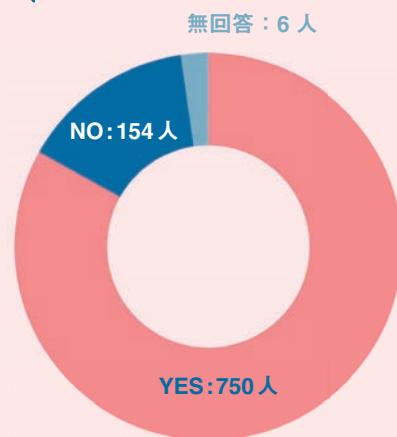
京都大学で、地域経済学の視点から再生可能エネルギーを研究。長崎県にも拠点を置き、地熱を利用した事業を多数手がける。

京都のU35 世代 910 人に聞きました。

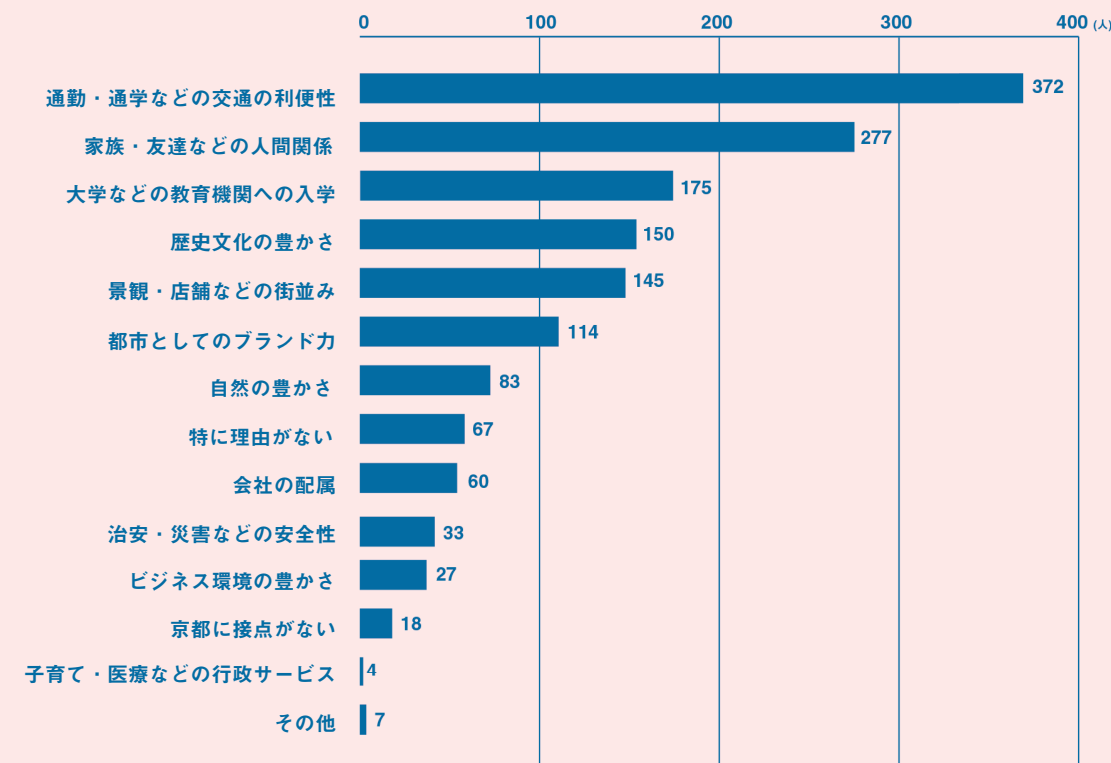
ウェブ上で 35 歳以下の 910 人に、アンケートを実施しました。
実施期間：2020 年 11 月～2021 年 1 月



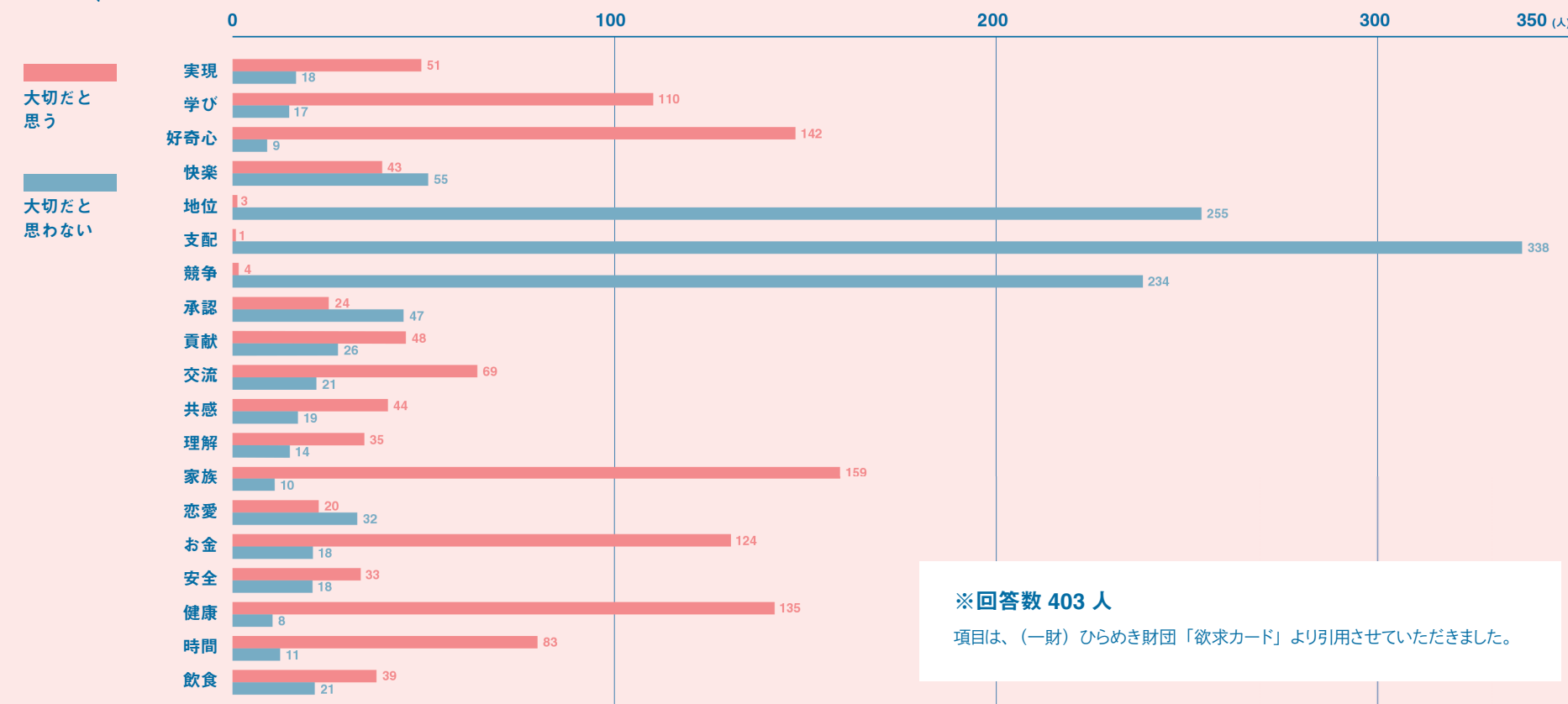
Q.SDGs を知っていますか？



Q. 京都に住みたい（働きたい、学びたいなども含む）と思った理由、もしくは住み続けている理由はなんですか？（複数回答可）



Q. 次の 19 項目のうち、自分の人生にとって特に "大切だと思うもの"・"大切だと思わないもの" を 3 つ選んでください。



Q. 次の社会課題にまつわるキーワードのうち、特に関心のあるものを 3 つ選んでください。(単位：人)



先輩たちに聞きました。

いまの京都を形づくってこられた先輩方に、U35 世代に期待することや U35 世代との関わり方、本紙のコンセプト「遊」(最終ページ参照)について、お考えを伺いました。



仲間との一体感の中で我を忘れた状態こそが、一番の「自由」である。

熊野 英介
アマタホールディングス (株) 代表取締役 / (公財) 信頼資本財団 代表理事

日本の「自由」という概念は世界の中でも独特です。無我なんですよ。自我を出すことは真逆。子どもの遊びと同じで、自分を忘れて周りに溶け込んでいる時が、実は一番自由なんです。事業家も、社会に溶け込むことができればビジネスは成功します。資本主義社会において自由と呼ばれてきたものは、今ある情報の中から自らの行動を選択することでしかありません。皮肉なことに、人は賢くなればなるほど多様性を損なっているのかもしれない。皆さんには、本当の自由を手にして、社会に影響を与えてほしいです。

事業においては、仲間との一体感も大事ですね。チームの成功を自分ごととして喜べる状況をつくるには、個人の目標数値はない方がいいと思います。そして、若い人たちは、ほめてくれる人や喜んでくれる人ばかりに寄り添っていたらだめですよ。他者に評価されたいという気持ちは、不自由の始まり。承認欲求だけを追い求めるのはやめて、自分の心と向き合わないと。同じ夢を持つ仲間の可能性を信じ、チームに貢献できる自分の可能性を信じる。その前提には、社会は希望を待っているという、社会への期待があります。

資金がないと何もできないと言う人がいますが、そういう人は自分で何かをしたことがない評論家なのだと思います。資本とは貨幣的なものに限られません。実行者に信頼関係を作る力があれば、経営資源 (人・モノ・金・情報) を集める事が出来ます。そういう人間力さえあれば、資金がなくても事業が出来るのが、本当の資本主義です。そのような社会では、事業者は未来への期待値を上げる信頼力を培う事が大事です。

大人たちの多くは、自分たちが経験した前例を基準にしか考えられないんですよ。それでは、今起きている世の中の激変に思考がついていきません。本当は、40代、50代が経験則から抜け出して動けると、一番いいんだけどね。その世代の考え方が変われば、ダイナミックに世の中が変わると思います。

成長を目指さない経済における幸福の例が、京都の東山文化にある。

経済成長を続けてきた人類は、今まさに経済の停滞という前例のない状況に踏み込もうとしています。皆さんには、

成長を目指さない経済の先行事例がかつての日本にあったことを知っていただきたい。江戸時代の日本は、鎖国によって国外からの輸入もなく、人口も増えませんでした。そんな時代に京都の人々は、「粋」や「侘び」「寂び」という美意識を育み、経済の基準では測れない文化的な価値を発展させていきました。

龍安寺の石庭を見たことがありますか。石と苔だけの庭ですが、世界遺産にも登録され、500年以上、人々に価値を提供し続けています。今、モノではなくサービスやスタイルに価値を見出す新しい資本主義のあり方を、世界中が模索しています。茶道や華道に代表される日本文化は、モノがない時代に新たな価値を生んだ事例として、世界に誇れるものではないでしょうか。



遊ぶように働き、働きながら遊ぶ。

近藤 令子 Voice4u (株) 取締役



30 代は自分のやりたいことを、思う存分やらないといけない。

松山 大耕 妙心寺退蔵院副住職
京都市「未来の担い手・若者会議 U35」元議長

「遊」という漢字の語源を調べると、「神さまの霊がゆくこと、気ままに行動すること」から転じて「人が興の趣くままに行動して楽しむこと」と書いてありました。何にもとらわれず、自分の感性のままに生きる。そんな風に生きられたら素晴らしいことです。しかし、年齢を重ねるとなかなか難しくなってきます。

大学時代の恩師が当時まだ 20 代前半の私にこんなことをおっしゃいました。「40代になると本業以外にもさまざまな社会的な役割を担うことになる。だから、30代は自分のやりたいことを、本業を思う存分やらないといけない」。42 歳を迎えたいま、先生のお言葉が非常によくわかります、その言葉に倣って駆け抜けた 30代はとても充実していました。

未来の担い手・若者会議 U35 の活動はここ京都で活躍するさまざまな分野の皆さんと出会えるかけがえのない場でした。今でも多くの皆さんとつながり、地域のため、京都のために一緒にする機会もたくさんあります。

自分の感性を信じてパワフルに動く。そして、志を同じくする同世代の仲間と時代を切り拓く。それは、20 代・30 代でしかできない貴重な経験であり、地域の活力になります。先輩として、皆さんの活動を心から応援しています。

自分より若い人から「会いたい」と言われたら絶対に断らないようにしています。発想が柔軟ですし、別の視点から今の社会を生き抜くヒントを与えてくれるので、「教え導く」のではなく、常に「一緒に知恵を出し合う」つもりで接しています。

20 年ほど前、(株) はてなの創業メンバーとして京都で奮闘していた時、私たちに「働かねばならない」という意識はありませんでした。ゼロから新しい仕組みを作り、使って喜んでくれる人が増えるたびに幸せを感じる。その楽しさがベースにあり、遊ぶように働き、働きながら遊んでいました。周りの大人たちは世間知らずの私たちを応援してくださり、売上がなく困窮した時には一緒にピザ配りましてくれました。京都には昔から、新しい価値を生み出そうと挑戦する若者を応援する風気があったのです。

コロナ禍のこんな時代だからこそ、自分の直感を信じて動いてほしいです。もし自分にアイデアがなくても、動くことで自分を求めている他者との出会いがあるはずです。一つひとつは明確な意味がなくても、目の前のことにワクワクして取り組んでいれば、いつかそれらがまとまった意味を持ち、形になります。一緒に京都を盛り上げましょう。

「はばたけ未来へ！ 京プラン2025」 8つの重点戦略

重点戦略とは 「はばたけ未来へ！ 京プラン 2025」において、京都がめざすべき未来像を実現するために、とくに優先的に取り組むべき政策。

菊池 杏子 西陣 爪搔き本綴 織り職人

苦難や混迷の程に
人は美し文化を創る

きれいだから。帯を作る理由は、その一言に尽きる。息を呑むほどの美しさを、何百年も昔に織られた着物が味わせてくれるのだ。文化は時代のうねりの中で生まれる。変革による出会いや衝突、葛藤が、表現者を奮い立たせるのだろう。この道に入って9年。その間に一度だけ、師匠に作品を褒められたことがある。必死だった当時は、それをどう織ったのかも、なぜ褒められたのかもわからなかった。その帯の価値を確信できるようになった今も、その理由はわからない。文化の創造に近道はない。しかし、積み重ねてきたものは決して消えはしない。人が創り出した圧倒的な美は、見るものの心を打つ。あらゆる経験を糧に、一步一步進んでいきたい。

~Kyoko Kikuchi~
フランスで5年間芸術を学んだ後、綴織の織元へ。織りだけでなく、図案や配色も自身で手掛ける。2018年に独立。



文化を創造

「はばたけ未来へ！ 京プラン 2025」の詳細はこちらを御覧ください。



私たちの行動の根づにはいつも、心の動きがあります。それは問いや迷いかもしれないし、喜びや戸惑い、感動、時には怒りかもしれません。皆さんの目がどんな言葉を捉え、そこからどんな思いを抱いたか、お聞かせいただけたら嬉しいです。

市が定めた8つの決意に寄せて、U35世代の8名に彼らが大切にしている言葉への思いを語ってもらいました。

この重点戦略をしばらく眺めてみた時、あなたの目にはどんな言葉が目に残ったでしょうか。人それぞれ、答えは違うと思います。

U35-KYOTO の思い

藤木 庄五郎 (株) バイオーム 代表取締役

鴨川・河川敷のコスモポリタン

仕事の気分転換に鴨川に来た。コロナ禍の閉塞感の中でも、植物は元気に咲き誇っている。植物には個体としての移動能力がなく、その場所で踏ん張るしかない。そんな植物の苦悩を今の自分と重ねながら、研究室の後輩の言葉を思い出した。「特定の場所に特定の生物種が生きていることには理由があるはずで、その理由を考えることが自分の使命だ」と彼は言った。どれどれと、目の前の植物たちを眺めてみた。河川敷でみられる植物の多くはコスモポリタンと呼ばれ、世界中どこにでも生息するそうだ。コスモポリタンとは「一つの国や民族にとらわれず、全世界を自国として考え、生活する人」を意味する。彼は今、海外で研究をしているらしいが、元気でやっているのだろうか。

~Shogoro Fujiki~
生物多様性を保全するプラットフォームを開発。学生時代は研究のためボルネオ島のジャングルに2年間滞在した。



自然共生

日下部 淑世 (株) めい co-founder

同じ時の旅人

自分の記憶を越えた土地の記憶がある。肌で感じたのは初めて京都に入った14の時。生意気にも私は、観光客というより旅人の心持ちだった。マイベースな普通列車を乗り継ぎ、行き先を選ばず、偉人たちの足跡を一つずつ確かめるように歩いた日。空間も時間も一繋ぎであることに気がついた。名が残っている人、残っていない人、全ての暮らしが分け隔てなく尊いものとして存在してきたことにも。このまちを形成しているのは時間を越えた全市民による営みの重なりだ。今も変わらず、ガイドブックやインターネットに用意された予測できる非日常ではなく、素晴らしい偶然の出会いと発見のある日常に豊かさを感じ、創造性を掻き立てられている。

~Toshiyo Kusakabe~
リノベーションにより KAGAN HOTEL などのユニークな職住近接型住居を展開し、多様なワークライフスタイルを実現する。



曲をかな

市民生活の豊かさと文化の継承・創造につなげる
「観光の京都モデル構築・発信戦略」

京都の文化、知恵を生かした
「社会・経済価値創造戦略」

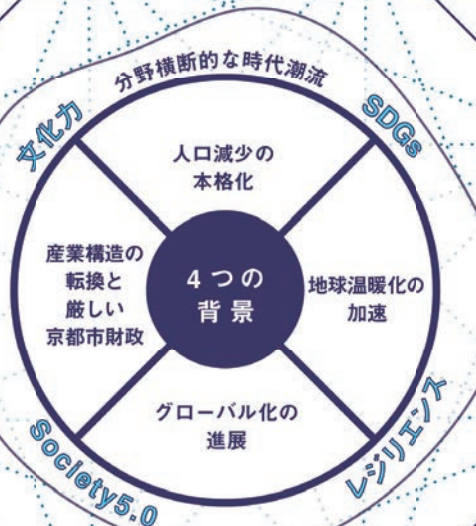
歩いて楽しい持続可能な都市を構築する
「土地・空間利用と都市機能配置戦略」

京都ならではのぐくみ文化が広がる
「担い手成長支援戦略」

人生100年時代に対応する
「地域力・福祉力を高めて
支え合うまちづくり戦略」

いのちとくらしを守り、都市の活力を支える
「強靱なインフラ整備戦略」

Society5.0：先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れ、経済発展と社会的課題の解決を両立していく新たな社会。レジリエンス：さまざまな危機からの回復力、復元力、強靱性（しなやかな強さ）を指す。



中村 朱美 (株) minitts 代表取締役

た、たひとかけらの“大好き”と
“さだわり”が、人を救うとしたら

個人的な趣味嗜好。私だけの小さなこだわり。もしそれが明日、人を救うとしたら？ 私たちの毎日は変化する。世界も、環境も、人間も、そして私も。これまでの固定観念だけで、これからの世界は作れるだろうか。これまで評価されてきたことは、果たして10年後、50年後にも評価されるのだろうか。素晴らしい商品もサービスも、最初はたった1人のために出来たものだ。愛する人を想って、誰かが小さなこだわりを貫いたのだった。たったひとかけらの“大好き”が、明日の誰かを救える世界があるのなら、私はその世界を全力で生きたい。京都が、そんな人たちがスポットライトを浴びるまちであるために。いま私たちが出来ることを1つずつ、やってやろうじゃないか。

~Akemi Nakamura~
1日100食限定で販売する「佰食屋」を運営。食品ロスゼロ、残業ゼロで、社員のやりがいと経営を両立する。



価値創造

湊 三次郎 ゆとなみ社 代表

理想を掲げて生き抜く難いこと、
誰もが感じ、もがいている

まちの活力が持続するには、文化が必要だ。その地盤となる自由な発想やアイデアは、本来なら若者が生み出すべきだろう。だが今、若者にそんな余裕がない。給料が低く、生活が苦しい。24歳で経営難の銭湯を継いだ時は、俗世を捨てての気持ちだった。そのぐらいの覚悟がないと、持続可能な言葉は掲げられないのではないか。この国は、このまちは、どこに向かっているのかと疑問に思ふようなニュースが増えている。他府県で育った僕は、京都に新しい何かを生む風土を感じた。気概のあるやつらは前例のないことでも気にせずどんどんやる。誰も変な目で見ない。生きた文化の持続を担う彼らが、このまちを愛し続けてくれることを願う。

~Sanjiro Minato~
24歳で廃業の危機にあった「サウナの梅湯」を受け継ぐ。銭湯文化を残すために活動を広げ、現在4軒を運営。



持続可能な都市

杉本 明子 上京消防団 乾隆分団

放、とかないで、言葉をかけよう
をしたら、楽しくなるから

職場の児童館で、屈託のない笑顔を見せる子どもたち。だんだん生き辛くなる世の中で彼らも頑張っているのだと、ふとした言動から痛感する。そんな中、消防団では大人が目を輝かせて未来を語る。10代の学生から70代のおじいちゃんまで、ごちゃ混ぜになって。よく意外だと言われるけれど、消防団はおもしろい。若手が何か提案すれば、先輩たちも「よっしゃ」と笑顔で応えてくれる。入団から十数年間、皆でがんばる一体感や熱量をずっと肌身で感じてきた。年齢や立場に関係なく、人と関わってお互いに言葉をかけ合うことが、人の、そしてまちの活力を生むのだ。人とのつながりが増えれば、大人も子どもも元気になれる。私はそう信じている。

~Akiko Sugimoto~
弟と共に20歳で入団。新しいチームの結成に携わり、市内205の分団を巻き込みながら、新しい消防団のあり方を模索中。



都市の活力

森口 誠 (一社) 暮らしランプ 代表理事

灯りを灯すように

眠れない夜に思い出を脚色して、自分をだましながら過ごす。偶然の重なりの中にいる「今」を筋書き通りのシナリオで進んできたかのようにごまかす。それは安心したいから。間違っていないと証明したいから。眠れずに寒くなってきた朝方、毛布の中に長男が潜り込んできた。やさしい温かさに、傍にある愛に気が付いた。踊れる100歳でいたいなんて目標は持てず、幾度となく塗り替えられる未来予想に翻弄されながら、その時まで生き抜くのだろう。だけど、もし未来をこの手で描けるとしたら、「傍にある愛」を感じる心をもって生きられる日々、世界を創りたい。そのためにできることはなんだ。そんな問いを抱き続ける100歳になら、少しなってみたい。

~Makoto Moriguchi~
障害のある方の就労支援やアートプログラム開発など、町の中にほっとする出来事を届ける様々な事業を運営。



人生100年時代